

三卷の回回曆法などもあつて、こゝに曰ふ數篇の中に數へられたものであらう。

第三は馬沙亦黑の傳記であつて(三十枚左、三十一枚右)、従つて茲に傳へんとする最も肝要なものである。

明吳諒、原名馬沙亦黑、撒馬兒罕國人也、洪武十二年、選吏部員外陳誠・戸部主政李暹、使西域至其國、凡五往返、均相得、諒遂同使臣東來入覲、時舉止吐屬不類遠人、高皇帝深奇之、命制渾天儀、以正前代得失、授爲刻漏博士、所著有法象書數篇、帝褒獎者再、外特設回回博士科、以官其僭來者、並命劉基・吳伯宗譯其經、尋授諒內靈臺太史院、永樂三年隨駕遷燕京、授欽天監五官靈臺郎、世襲秋官正職、諒立朝率眞無機緘、上每以長者目之、成祖雖盛怒時、輒敢矢誠規諫、帝竟霽威容納之、其子景忠、襲父職、後裔繼承家學、終明之世、俱官天文生、世襲罔替云。

此の傳によると馬沙亦黑は吳諒なる漢名を持つた人である、前に引いた洪武の詔勅には馬沙亦黑马哈麻と記されて居る、明史に回教祖 Mohammad を馬哈麻と譯出して居る例から考へると(曆志回回一)、これも同名の音譯であつて、恐らく Mashaikh Mohammad といふたものであらう、鄭曉の今言には洪武實録の文句(前出)を殆んど其の儘に寫して、然も此の人の名を編修馬懿赤黑として居るのは(成吉思汗實錄序論一二)、いふ迄もなく誤である。

此の傳に従ふと、馬沙亦黑は撒馬兒罕 Samarkand の人で、洪武十二年陳誠・李暹等が西域に使して其の國に行つた時に、同道して東來し、洪武の朝に仕へるに至つたといふのであるが、これは甚だ承認し難いことである、洪武帝は早くより西域に通ぜんとして、使を遣はして諸國を招諭したことはあつたけれども成功せず、撒馬兒罕の初めて通ずるに至つたのは、洪武二十年のことである(明史撒馬兒罕傳、殊域周咨錄)、また陳誠・李暹等が西方撒馬兒罕及びその